

三陸の近景

⑥

「希望の灯り」をめぐる想い

岩手県陸前高田市内には「奇跡の一本松」の他にもいくつかの観光スポットがあります。中でも私がよくご案内する場所は、市内北部の山の中腹にある「左官伝承館」です。市内を見下ろせる眺望の良い場所にある伝承館は「気仙大工」として全国に知られる当地の大工の技術を結集し、意匠を凝らした建物が保存されています。

それに加えて、震災から9カ月後に「希望の灯り」というモニュメントが設置されました。これは、阪神淡路大震災を風化させないために設立された「1.17希望の灯り」から分灯されたもので、震災後に神戸を訪れた三陸沿岸部の遺族の方々が「私たちの町にもこのよう

なモニュメントがあれば」と提案し設置されたものです。

この「希望の灯り」は文字通り、見る人に希望を感じさせてくれます。また、突然の津波で自宅や大切な方を亡くされた人々の気持ちを寄せる場所としてモニュメントが設けられたことは、これから一層重要な意味を持つことでしょう。同様のものが現在、岩手県の大槌町や釜石市、福島県南相馬市にも設置され、神戸からの分灯が今後も被災地に広がるということです。



先日「希望の灯り」と彫られた文字についての話を伺う機会がありました。伝承館の語り部の方が「この話をするのは初めてなのですが」と前置きした上で、次の話をしてくださいました。

「題字『希望の灯り』は、モニュメント設置に尽力された方が書かれたものです。その方は街の復興を見届ける事なく、先日亡くなられてしまいました。刻まれた文字を見るたびに、故人への想いがあふれて泣けてしまうのです。この文字は残された私たちへのエールだと感じています」

震災から2年10カ月の月日が経つ間に、復興に尽力しながら亡くなられた方が多くいらっしゃることをあらためて思わされました。また同時に、被災地で今を生きる方々は復興への使命感を強くお持ちなのです。お話を聞いた後、さっきまで見ていた「希望の灯り」の題字が、語り部の言葉のように力強く見えました。（金澤 豊）